

首都大学東京都市教養学部人文・社会系
首都大学東京人文科学研究科
「人文学報」第513-7号
(日本語教育学)
2017年3月抜刷

隣接する無敬語・敬語地域の
言語景観にみられる待遇表現の違い (近畿編)

ダニエル・ロング 斎藤 敬太

隣接する無敬語・敬語地域の 言語景観にみられる待遇表現の違い(近畿編)

ダニエル・ロング
斎藤 敬太

1. はじめに

日本語の方言には独自の敬語(標準語の敬語と異なる表現)を持つ方言と、持たない方言の二種類がある。例えば、東京の共通語の「お書きになっているよ」は大阪方言では「書いてはるで」と言う。一方、和歌山県の田辺市では「書いとるど」のような無敬語の言い方ができて、敬語にしようと思えば、標準語に切り替えて「お書きになっている」という選択があっても方言独自の敬語がそもそも存在しないからその選択はない。

日本各地で敬語形式を持つ方言と、無敬語の方言が隣接している地域が多くある。ロング・斎藤(2016)でそうした方言の例として方言敬語が発達している会津方言と無敬語といわれる福島市方言について考えた。本稿では近畿圏における無敬語と敬語地域の両方言について考え、特にそうした地域における待遇表現の有り方に注目する。また、近畿圏を中心とするが福島県の方言についても扱う。

2. 近畿地方の言語景観にみられる方言使用

ここで方言について考える際になぜ言語景観(ロング2010a)に注目するかについて考察したい。方言は主に話し言葉として用いられ、また一般言語学や方言学ではデータとしては書き言葉を避け話し言葉を望ましいものとする傾向が強い。そこで、言語景観論(中井・ロング2011)で取って書き言葉に注目したのはなぜかという説明が必要である。

言語景観に現れる方言は2種類に分けることができる。1つ目は意図的に使われるもの、すなわち方言だと分かっているながらも使用される方言である。2つ目は無意識に使われるもの、すなわち標準語だと思込んで使われる擬似標準語(気づかない方言、気づかれにくい方言など)である。前者も後者も言語意識の研究に役立つ。前者は当該地域で地元の方全体に対する愛着やプライド、恥ずかしさや嫌悪感などが持たれているかという「方言評価」(dialect evaluation)の研究で役立つ。後者は、ある特定の言語事象を地元の話者が方言として認識しているか標準語だと思っているかの「方言分別認識」(dialect categorization perception)の研究材料になる。

公なところで使われる文字言語、いわゆる「言語景観」を分析することで当該地域における方言に対する意識をみることができる。また、場合によっては地元の人が方言だと思っていない言語形式(擬似標準語)を見ることもできる。

前者と後者を見分ける方法はいくつかある。一つは地元の人に提示し、「これは標準語ですか」と聞いて調査することである。もう一つは、看板を作った人（メッセージの送り手）が見た人（受け手）の注意を引こうとしているかどうかの点である。方言は普段書き言葉として使われないため、たまに方言で書かれた看板を見ると意外性があり、注意を引く。その点において方言を含めた看板は口語、俗語、古めかしい言い方、新語、造語などを含めた看板と似た効果がある。また、送り手がユーモアや皮肉といった特別な感情をこめて書いたと感じられるか、それともドライな感じを受けるかという点も挙げられる。さらに、仮に看板に含まれる方言を標準語に置き換えた場合、送り手が狙ったと思われる効果が得られるかどうかという判断もある。これらをまとめると以下の表1のようになる。

表1 看板に含まれる方言の意識的使用を判断する基準

	意識的に使われる方言	無意識に使われる方言
1. 地元話者の顕在的認識	聞かれたら方言だと答える	聞かれたら標準語だと答える
2. 看板の文句から読み取れる語用論的意図	見る人の注意を引こうとする (方言による飲酒運転、本稿5節のシートベルト注意など)	淡々と事実を伝えているのみ
3. こめられている感情	ユーモアをこめて書いている	特に感情をこめていないドライな表示
4. 送り手が狙っている効果	標準語に置き換えたら送り手が狙っている効果が得られない	標準語に切り替えても効果が下らない
5. 地元らしさをアピール	文化的観光資源（ロング2007）。ただ単に「関西方言」や「東北方言」ではなく、細かい地域差のアピールも含めて	そもそも方言だと思っていなければ使いようがない

方言と意識して使われている看板の例として図1の「茂美志屋の郷土料理 長浜へ来たら食べんとな」が挙げられる。無意識に使われる疑似標準語後者の例としては図2の「モータープール」が挙げられる。

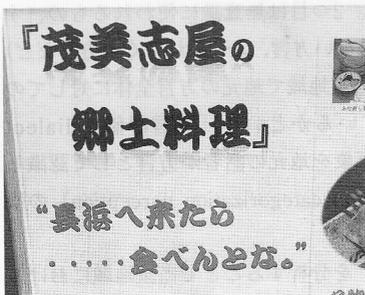


図1 「長浜へ来たら食べんとな」



図2 「モータープール」

上記は関西方言として比較的広範囲にみられるものであるが、意識した方言使用の中には、細かい地域差を出しているものもみられる。図3は福島県会津若松市内にある南会津産の野菜を販売する商店である。南会津は会津地方に属するが、会津若松市を中心に使用される会津方言とは異なる南会津方言を用いる。図に見られる「よってがっしえ」は南会津方言で「寄ってってください」を意味し、商店のある会津若松市で用いられる会津方言「よってがせ」や「よってがんしょ」とは微妙な差異があり、これが南会津に関連していることをアピールしていると考えられる。



図3 南会津の「よってがっしえ」

3. 近畿地方の言語景觀にみられる依頼・命令形

図4にあるのは和歌山県田辺市にある「よってって」産直市場である。「寄ってって」という意味であり、無敬語の表現に当たる。もちろん方言敬語と方言丁寧語が存在する大阪でも「よってって」(図5)のような無敬語(尊敬語も丁寧語もない)表現が言語景觀で使われる。大阪南(なんば)で撮った図6ではこれに関西方言の文末詞「や」をつけることで関西らしさを出すことができる表現にしていた(よってってや!)。図7では西日本方言にみられる動詞のウ音便が見られ、「たのむワ買うてえ屋」というだじゃれにしていた。

さて、本稿で問題にしているのは、方言敬語を持たない田辺のようなところでは、方言敬語を使う選択がないということである。看板は方言にするか(標準語に切り替えて)敬語にするかという選択になる。大阪で見られた図8の「あんたら買うていきなはれ!」はまさに方言敬語の例である。田辺で比較できるのは図9にある「うちの新鮮な魚買うてよ~!」である。これは「よってって」店内に見られた張り紙である。地元の方言を選択した段階で敬語を使わないことも選択することになるのである。



図4 和歌山県田辺市にある産直市場「よってって」



図5 大阪市新世界の「よってって」

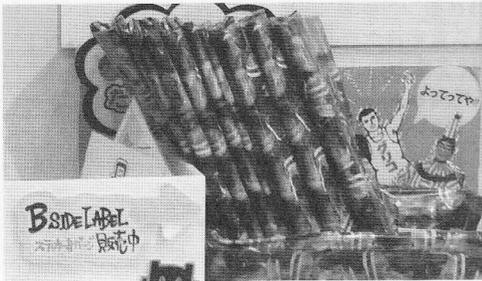


図6 大阪なんばの「よってってや！」



図7 「たのむわ買うてえ屋」(大阪市南)



図8 大阪市なんばの「買うていきなはれ」

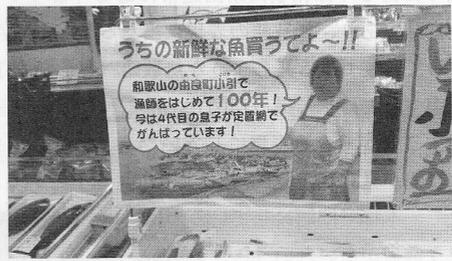


図9 田辺の方言の依頼表現「買うてよ〜」

以上で述べたような依頼・命令形を京都・大阪・田辺（以上近畿）・会津・中通り・浜通り（以上福島県）の各方言で「来い」を例に対照表を作成するとおおむね表2のようになる。丁寧度の高い順に各表現を上から並べている（佐藤1959、斎藤2016、ロング・斎藤2016などを参照）。

ここに載せた形式が全てというわけではないものの、近畿では京都、福島県では会津が最も表現、つまり丁寧度の表し方が細かいことが窺える。一方、無敬語とされる田辺・中通り・浜通りを見ると、田辺と浜通りは表現がほとんどないのに対し、中通りは丁寧度の表し方が細か

く、数の上では会津と変わらないことがわかる。中通りの中でも福島市のある北部は中南部に比べて敬語が存在しており、そのためこの依頼・命令形に関しては完全な無敬語とは言えないのである。

表2 依頼の方言比較対照表

東京方言	京都市方言	大阪市方言	田辺方言	会津方言	中通り（福島市）方言	浜通り方言
おこください	おいでやす			こらはんしょ		
	きなはれ	きなはれ		こらんしょ	こらんしょ	
きてください	きて	きて			こらっせ	
きて	きい	きい（や）	きい（や）	きっせ	きっせ	
こい	こい	こい	こい	こ（こい）	こ（こい）	こ（こい）

4. 各地の方言における「方言敬語」と「方言丁寧語」

前節の「買うていきなはれ」で見たように京阪方言には素材の人物に対するポライトネス（配慮）を表す方法がある。これ以外にも話し相手に対するポライトネス（標準語のデス・マスの丁寧語）に当たる形式を持っている方言もある。図10は大阪で見られた「大阪名物の串かつなら間違いなくウチでっせ！」（～ウチですよ！）と方言丁寧形「でっせ」が用いられたものである。このように大阪の方言には丁寧を表す助詞が存在する。一方田辺では、従来の方言には丁寧を示すものはないとされる。図11は田辺で見られた「ほんまにおいし～い」という表示であるが、大阪や京都の方言では丁寧を示す助詞を用いることが可能だが、この方言にはそれがないため、このように「おいし～い」と書くか、標準語で「おいしいです」のように書くしかない。



図10 大阪の方言丁寧語 「ウチでっせ！」



図11 田辺の「ほんまにおいし～い」

日本各地の方言に存在するポライトネスを見ると、いくつかに分類できる。表3～表8では、各方言での「来る」について言語的な「気遣い」を「話題の人物」に対するものと「相手」に対するものに分けて考察している。「相手に対してポライトネスがある」とはつまり丁寧語に

あたるものがあるか、「素材の人物に対してポライトネスがある」とはつまり敬語ということである。以下、近畿や福島県に限らず見ていく。

表4のように、大阪方言のような場合は標準語のそれと対応するように敬語や丁寧語を有していることがわかる。次に表5を見てみる。会津方言は一見すると大阪方言の場合と同じように見えるかもしれないが、厳密には「相手に対してポライトネスあり」、つまり丁寧語の欄に違いがある。標準語における丁寧語はよく「です・ます」と説明されるが、会津方言において「ます」に相当する表現と「です」に当たるその使用が異なるのでここで補足説明をしたい。会津方言には丁寧を表す助詞「し」が存在する。これは従来様々な文末に用いて丁寧な文体にすることができる。まず丁寧語に当たる表現のうち「ます」に相当する表現だが、佐藤（1959：12）には「行きます」に対して「エグシ」（「行く＋し」という語形があるものの、実際は勢力が弱く「エンカラシ」のように「から」を挟んだ語形が普通であると記している。これについて高年層及び中年層の会津方言話者に聞き取りを行ったところ、高年層は「来ました」にあたる方言について「きたし」は使えるとしたものの、やはり「から」を挟んだ語形である「きたからし」（意味には標準語のような「原因・理由」は特に含まれない）を使用すると発言していた。しかし、中年層になるとそれらのような表現について「使わない、聞かない」と言っていた。しいて言うなら標準語形を用いることになる。すなわち「動詞のマス」という意味の丁寧語はかつてあったものの、間に「から」を挟みながらも現在衰退しつつあると言えそうだ。

同じく丁寧語に当たる「です」に関しては、従来「村だし」（村だ＋し）が存在するものの「から」を挟んだ「村だからし」が一般的である（佐藤1959：12）という部分では同じように感じるが、同様に高齢層及び中年層に聞き取りをしたところ、「～だし」より「～だからし」のほうが使うとする高齢層の回答は上述の「ます」同様佐藤（1959）と同じであるが、中年層についても「～だからし」は使えるとしていた。また、先の「きたし」「きたからし」は言えないとした中年層において、「きらったんだからし」「きたんだからし」と「だからし」を用いた場合は言えなくもないと発言していた。つまり、「ます」に当たる動詞接続の「からし」とは異なり「です」に当たる「だ」接続の「からし」は勢力が弱まっていない可能性が窺える。なお、観光客向けのような箱入りのお土産ではなく、地元住民向けの袋入りの喜多方ラーメンの商品名に「だからし」を用いた「これだからし」（「か」は有声化を再現して「が」となっている）が確認でき、観光向けではなくても「だからし」が使われていることがわかる（図12）。

表3 敬語あり・丁寧語あり（標準語）

相手に対して 素材の人物に対して	ポライトネスあり	ポライトネスなし
ポライトネスあり	いらっしゃいましたよ	いらっしゃったよ
ポライトネスなし	きましたよ	きたよ

表4 方言敬語あり・方言丁寧語ありの方言（例：大阪方言）

相手に対して 素材の人物に対して	ポライトネスあり	ポライトネスなし
ポライトネスあり	きはりましたよ	きはったで
ポライトネスなし	きまっせ	きたで

表5 「方言敬語あり・方言丁寧語あり」の変種（例：会津方言）

相手に対して 素材の人物に対して	ポライトネスあり	ポライトネスなし
ポライトネスあり	きらったんだからし〈現在〉 きらったからし〈やや古い〉 きらったし〈もっと古い〉	きらったぞ
ポライトネスなし	きたんだからし〈現在〉 きたからし〈やや古い〉 きたし〈もっと古い〉	きたぞ

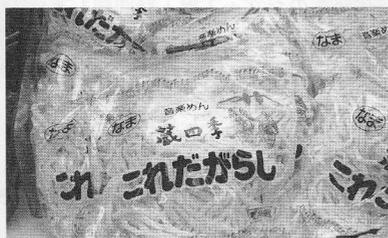


図12 会津方言の丁寧形「これだからし」

表6にあたる福島県中通り方言（福島市のある北部ではなく郡山市のある中部や白河市のある南部）は、丁寧語にあたる「なえ」は存在するものの、敬語が存在しない。表7のような敬語あり・丁寧語なしの場合とは対照的である（佐藤1959：18、ロング・斎藤2016：91図42）。そして表8のように典型的な無敬語方言では、敬語も丁寧語もないとされる。

表6 方言敬語なし・方言丁寧語ありの方言（例：郡山方言）（佐藤1959参照）

相手に対して 素材の人物に対して	ポライトネスあり	ポライトネスなし
ポライトネスあり		
ポライトネスなし	きたぞえ	きたぞ

表7 方言敬語あり・方言丁寧語なしの方言（例：中国地方）

相手に対して 素材の人物に対して	ポライトネスあり	ポライトネスなし
ポライトネスあり		きちゃった
ポライトネスなし		きた

表8 方言敬語なし・方言丁寧語なしの方言（例：和歌山県田辺方言）

相手に対して 素材の人物に対して	ポライトネスあり	ポライトネスなし
ポライトネスあり		
ポライトネスなし		きたど

また、福島県の方言について、標準語の「そうですね」は「述語+繫辞+丁寧+モダリティ」だが、会津方言の「そうだなし」や福島市方言の「そうだない」は「述語+繫辞+モダリティ+丁寧」となる。同様に会津方言の「そうなのかし」は疑問文であるが、「述語+ノダ文+疑問詞+丁寧」であり、標準語の「そうなんですか」の「述語+のだ文+丁寧+疑問詞」とは丁寧を示す形態素の位置が異なる。日本語の方言は形態論的な変異（バリエーション）はごく一般的であるが、これは形態素の種類（変異形）の違い（それなら形態論レベルにおける変異）ではなく、形態素の順番（！）の変異であるので、統語論的（シンタクス）な変異に当たるのである（松丸真大2014の滋賀方言における形態素順番の入れ替わりに関する論文参照）。

以下の看板の写真はいずれも大阪方言の「方言丁寧語」の形式を使っている。図13は「ですか」に当たる「でっか」、図14は「～ますよ」に相当する「～まっせ」、図15は「～ますか」と同等の「～まっか」である。

和歌山県田辺方言は、前述のとおり無敬語方言と呼ばれる。そのため、言語的な「ポライトネス」という側面でいえば「なし」といえる。それは表3～8で述べた「素材の人物に対して」ポライトネス（配慮）を表す方法が方言にないということである。表そうと思えば、標準語の敬語（買ってください）を採用するか、京阪のハル敬語（買いなはれ）などを採用する以外に手段がない。しかし、それだけではなく、「話し相手に対するポライトネス」を表す方法もない。表そうと思えば標準語に切り替えて「です、ます」を使うしかない。図13、図14、図15で見るように、大阪方言ならば、こうした「方言丁寧語」が存在する。



図13 大阪方言丁寧語「どうでっか〜」

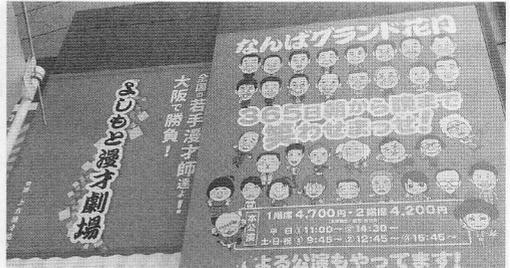


図14 大阪方言丁寧語「笑わせませっせ」



図15 大阪方言丁寧語「かえりまっか?」

5. 近畿地方の言語景觀にみられる勧誘・意思形

上で述べてきたことをまとめると、次の3点が浮き彫りになった。

- (1) 田辺方言で相手に対するポライトネス（丁寧語）を表せない。
- (2) 田辺方言で素材の人物に対するポライトネス（素材敬語）を表せない。
- (3) 田辺方言で独自の方言らしさを表せない。

和歌山県田辺地域は無敬語地帯で、その方言には話し相手に対するポライトネスを表す手段（丁寧語）がなければ、素材の人物に対する敬意を表す手段（素材敬語）もない。それが近隣地域の京阪方言と大きく異なる点である。図8の「買っていきなはれ」で確認したように、京阪方言にはその手段（ハル敬語）がある。この用法は畿内から外に向かっていくつかの方向に広がっているが、和歌山への伝播はしなかったようである（図16）。また図10、13、14、15で見てきたように、京阪方言には「でっせ、でっか、まっせ、まっか」のように方言丁寧語で相手に対するポライトネスを表すこともできる。しかし、田辺方言を文化的観光資源（ロング2007、2009、2010）として利用することはできないわけではない。図9でみた依頼表現「買ってよ〜！」や図11の「ほんまにおいし〜い」でそれを確認することができた。しかし、これらの方言形式は田辺独特なものではなく、ウ音便は西日本全域に見られるし、「ほんま」は関西全域で使用される。そのため畿内都市部から田辺を訪れる観光客にとって、これらの表現は標

準語と異なるという意味では注意を引くし、方言の暖かさが伝わるであろうが、京阪と違った独特な雰囲気醸し出すために役立っているとは考えにくい。

しかし、それでもって田辺方言は文化的・観光的資源として役立っていないというわけではない。田辺方言話者がみつけた賢い方言応用方法があった。それは田辺方言独特の勧誘・意思形にあった。後に図18、図19の「いこら」「あるこら」(行こう、歩こう)にその用法を見るが、まずその前に近隣地域である、京阪方言における勧誘・意思表示の方言使用について考えよう。京阪方言において「行こう」、「歩こう」に当たる表現は語形式としては標準語と変わらない。京阪方言の単語アクセントの違いや勧誘表現の独特な発話イントネーションはあるが、そうした韻律(超分節的特徴)は看板の書き言葉で表すのはほとんど無理であろう。また「行きまひょう」、「歩きまひょう」という言い方は存在するが、なぜか看板で使われることはあまりない。

図17で関西方言の少し面白い勧誘表現をみつけた。写真は大阪府豊中市の駅ホームで見た注意喚起の看板である。「STOPザ“放置自転車”／ちょっとそこの人そんな所に止めたら迷惑でっせ。皆でマナーを守ろうやおまへんか。」(守ろうじゃありませんか)と書かれている。この「でっせ」や「おまへん」は古めかしい感じがする表現で、会話で聞いたら笑いを誘いそうである。しかし、こうした表現が存在するのは動かない事実である。これは「方言丁寧語」に当たるものであり、厳密に言う敬語(狭義)とは異なる。

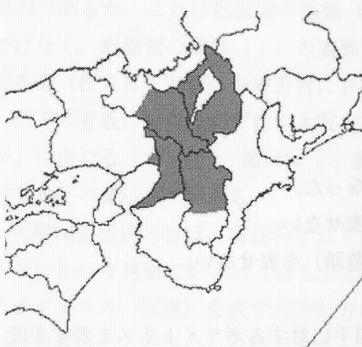


図16 「ハル敬語の使用地域(中井2012:49による) 図17 「守ろうやおまへんか」(勧誘形)

さて、田辺地域で使われる勧誘表現の方言用法を見よう。上述のように田辺市は近畿方言に属するので、多くの文法事項は大阪方言や京都方言と共通する。それらを言語景観で使っても田辺の独自性を出すのは難しいと言える。しかし、五段動詞の勧誘表現「-ora」、一段動詞の「-yora」を使うことで一般の近畿方言と異なった味わいを出すことができるのである。図18にあるのは「まちナビでいこら田辺!」。図19には「スマホといっしょに歩こらよ」が見られる。



図18 「いこら」(行こう、勧誘形)



図19 「歩こうよ」(歩こうよ)

インターネットの和歌山方言（紀州弁）に関する複数の書き込みにはこのような勧誘表現が写真（言語景観）の形で取り上げられている。「つれもていこら！ぶらくり丁へ」（一緒に行こう）、「つれもてしよら シートベルト」（一緒にしよう シートベルト）、「つれもて飲もら、キリン！」といった使い方である（大日本観光新聞2015、ばあど2011、ウィキペディア2016）。田辺市だけではなく和歌山県らしさを醸し出す文化的観光資源としてこの表現が役立っていると言える。

6. おわりに

本稿では敬語をもつ方言と隣接する無敬語の方言の例として、ハル敬語を持つ大阪方言と田辺方言が含まれる和歌山方言について考察した。これらの地域の話しことばのみならず、方言を含む言語景観にもその違いを窺い知ることができる。このようにポライトネスを表すと同時に方言を使うことはできないが、方言がその地域らしさをアピールする文化的観光資源として使われていることが明らかとなった。今後は福島県の中通りを扱った前編（ロング・斎藤2016）に続いて福島県の浜通り方言の比較を深めると同時に京都市や奈良北部方言と方言敬語を持たない近隣地域との比較をしたい。

付記

本研究はJSPS科研費基盤研究（B）15H03204「無敬語地帯の地域特性と敬語行動—日本語敬語研究の再起動をめざして—」（研究代表者中井精一）の助成及び公益財団法人日本科学協会による平成28年度笹川科学研究助成（助成者斎藤敬太）を受けて行なわれたものである。

参考文献

- 飯豊毅一（1969）「福島県方言における『ル』『ラル』敬語について」『国語学攷』49：23-35
- 井上史雄、田中宣廣、日高貢一郎、山下暁美、大橋敦夫（2013）『魅せる方言—地域語の底力』三省堂
- ウィキペディア（2016）「紀州弁」<https://ja.wikipedia.org/wiki/紀州弁>
- 大橋理枝、ダニエル・ロング（2011）『日本語からたどる文化』：224-227 放送大学教育振興会

- 斎藤敬太 (2016)「震災後の方言景観に見る福島県会津方言の変容」『日本語研究』36: 27-42
- 佐藤喜代治 (1959)「福島県方言の敬語法」『文化』23-2: 3-20 (東北大学文学部)
- 大日本観光新聞 (2015)「面白い和歌山弁」<http://bjtp.tokyo/omosiroi-wakayamaben/>
- 中井精一 (2012)『都市言語の形成と地域特性』和泉書院
- 中井精一、ダニエル・ロング共編 (2011)『世界の言語景観 日本の言語景観 ―景色のなかのことば―』: 264 pp. 桂書房
- 中井精一、東和明、ダニエル・ロング編 (2009)『南大東島の人と自然』南方新社
- ばあど (2011)「農家の嫁 修行日記@和歌山」<http://noukayome1.blog111.fc2.com/blog-date-20110416.html>
- 松丸真大 (2014)「関西方言からみた東京のことば―方言分布・伝播の違いを手がかりに―」第154回変異理論研究会にて口頭発表
- ロング、ダニエル、斎藤敬太 (2016)「隣接する無敬語・敬語地帯の言語景観にみられる待遇表現の違い (福島市編)」『人文学報』512-7: 75-93
- ロング、ダニエル編 (2007)「小笠原諸島の多言語状況に関する実態調査報告」『小笠原研究』32: 21-103
- ロング、ダニエル (2009)「南大東島ことばが作り上げる言語景観」『南大東島の人と自然 (中井精一、東和明、ダニエル・ロング共編)』: 74-87
- ロング、ダニエル (2010)「奄美ことばの言語景観」『東アジア内海の環境と文化 (内山純蔵、中井精一、中村大編、日本海総合研究プロジェクト報告5)』: 174-200 桂書房
- ロング、ダニエル (2012)「小笠原諸島における文化ツーリズムの可能性」『観光文化』214: 12-16 日本交通公社